

広島大学 大学教育研究センター 大学論集

第19集 (1989年度) 1990年3月発行：321-344

# 日本の大学授業に関する留学生の適応と批判

—数量的・記述的考察—

上原麻子・山崎博敏

## 目次

- 1 研究のねらい
  - 2 研究の方法
  - 3 分析結果
- 考察



# 日本の大学授業に関する留学生の適応と批判

—数量的・記述的考察—

上原麻子\*  
山崎博敏\*\*

## 1. 研究のねらい

世界各地の大学に異文化からの学生の数が増えている。それとともに、世界の留学生の受け入れ国から、彼らの中に留学先の大学の授業に適応できない者がいることも報告されている。<sup>1)</sup>これは各国の大学の教授法には、その国独自の大学観、世界観、価値観が含まれているために、実際にクラスで行われる授業の進め方、内容に違いがあるからであると考えられる。

教育過程への文化的影響を研究している Anderson と Powell は、ある文化で採択されている教授法は、それが他のやり方よりも優れているというよりも、むしろその文化の価値観を反映しているという。<sup>2)</sup>彼らは各国で培われた教授法を相対的視点からとらえており、それは教育の場において異文化理解を図る上で重要なことである。

しかし、さらに一步進めて、この留学先の大学の授業法に不適應症状を呈している問題を国際化の視点から研究する Wagner は、そのような問題は留学生だけの問題でなく、その国の学生にとっても問題である場合が多く、その国における教育機関の教授法改善の第一歩になりうると述べている。<sup>3)</sup>Wagner のこの考えには、大学教育の国際化というものは、大学が、自国の学生をも含め、文化的背景の異なる世界のどの国の学生にも通用する開かれた教育機関になる過程であるという、今日の国際化時代の教育理念が反映されている。どの国で発展した教授法にも重要な歴史的背景や教育的意義があり、それを尊重することは重要である。しかし同時にまた、今日、その教授法が国際的な時代の要請に応えうるものであるかどうかの検討をしなければならない時に来ていると考える。

日本の大学の授業については、内外からさまざまな批判がある。学生については不勉強、教員については、研究センターで授業に熱心でなく、一方的な知識伝達などがよく批判される。知日家のライシャワーによれば、日本の大学は日本社会の弱点の一つであり、中でも大学教育が非効率的であるとされている。<sup>4)</sup>外国人からみた日本の大学教育への批判は、喜多村を初めとする外国人教員や留学生を対象にした調査でも明らかにされている。<sup>5)</sup>

最近二、三年間の間に在日留学生の数は増加の一途を辿っているが、これらの留学生たちは日本の大学の授業をどのように観ているのであろうか。この論文では、日本の大学に学ぶ外国人留学生への調査から得られた自由記述意見を中心に分析して、日本の大学の授業の長所と短所を多角的に分析し、あわせて留学生教育のありかたを考察することを目的とする。我々は、1988年9月から1989年1月に、西日本の3つの大学に学ぶ外国人留学生 1100 人を対象に、「日本の大学教育に関する

\* 広島大学総合科学部助教授 (大学教育研究センター研究員)

\*\* 広島大学教育学部講師 (大学教育研究センター研究員)

意見調査」を実施した。その調査結果の一部はすでに報告したが<sup>6)</sup>、そこでは質問紙への回答の統計的分析が主なものであった。質問紙末尾の自由記述欄には興味ある意見が多数寄せられていたが、十分に分析されていなかった。ここでは主な統計的分析と自由記述意見の分析の結果を合わせて報告する。

われわれは、それらの結果を素材にして、日本の大学教育を、国際比較的な観点から相対的に評価するとともに、専門分野の違いを考慮して考察をすすめる。日本の大学教育については、従来、ステレオタイプ的な批判が多い。自由記述意見を読むと、賛否両論さまざままで、批判の内容も我々の気が付かなかったようなものが多い。異文化からみた場合のメリットであろう。さらに、留学生の出身地域や学問分野ごとに整理すると、論点もかなり異なっている。彼らの意見の中には、日本人学生のための大学授業改善につながるものもある。

また、この分析結果は、留学生教育にも多くの示唆を与えてくれる。留学生の日本の大学授業への批判を検討することにより、留学生教育の改善しなければならないいくつかの面が明らかになる。留学生教育を考えてみた場合、学位や奨学金などの問題も重要だが、授業やカリキュラムが変わらない限り、留学生問題の最終的解決にはならないからである。このように、留学生および日本人学生のための大学授業改善を検討することは、日本の大学の授業をより開かれたものにするために役立つと考える。

## 2. 研究の方法

西日本の3つの国立大学に学ぶ留学生約1100人を対象に質問紙を送付し、回答を依頼した。質問文は、日本語によるものの他に、英語、中国語（香港・台湾出身者用と中華人民共和国出身者用の2種類）、ハングル語に訳したものの計5種類を用意した。なお、日本語の質問文の外国語への翻訳は、翻訳の際に生じる意味やニュアンスのずれを出来るだけ小さくするために、バック・トランスレーション（back translation）の技法を用いた<sup>7)</sup>。質問紙は、日本語と4つの外国語のどれか一つのペアからなる。回答者には、出身地域・国籍を考慮してどれか一つのペアの質問紙を送付し、2つの言語のうち回答し易いものを選んでもらった。

質問紙は、大きく3つの部分に分かれる。第一の部分は、大学の「よい授業」の特性を聞く質問、第二は、日本の大学の授業に関する一般的な意見を聞く質問、第三は、日本の大学授業に関する意見を自由に記述する部分である。

質問紙は1988年9月に1大学に、1989年1月に2つの大学に配布した。配布総数は1100であった。有効回答数は374で、回収率は36.5%であった。なお、自由記述意見の欄に回答が記されていたのは全体の61.5%にあたる230であった。

第一と第二の質問については、回答の単純集計と回答者の属性によるクロス分析を中心とし、さらに第一の質問については因子分析も行った。

自由記述意見の回答は、内容分析の技法を用いて分析された。内容分析は、記述的データが大量にあるときに、それらを客観的、体系的、数量的に処理できる分析の一技法である。分析方法は、Selltiz

たちの基本枠組みに依った。<sup>8)</sup>分析は最初に、われわれが寄せられた全ての記述回答を読んで、それらを分類できる大きなカテゴリーを検討した。

質問で留学生たちに母国の授業と比較して、日本の大学の長所と短所、及びその他の日本の大学授業や教育に対する意見を述べてもらったので、回答はまず肯定的・否定的意見に分けられた。2つのグループに分けられた回答には、異なるさまざまな意見が述べられ、質問紙の余白にまで意見や提案、批判、要望などを書き込んだ者も多かったので、カテゴリー設定にあたっては、1)各カテゴリーが明確で、2)広範囲の記述を含む、という2つの基準を設けた。設定されたカテゴリーは、「授業」「教師」「学生」「制度」「設備」「留学生」「その他」の7つである。これらの7つのカテゴリーのうち、「授業」「教師」「留学生」は、さらに次のような下位の分析カテゴリーに分けられた。

「授業」－授業方法、授業内容、カリキュラム、テスト

「教師」－資質、学生への態度、授業への態度

「留学生」－資質、授業への態度

内容分析を行うに当たって分類が最も困難であった点は、「授業」と「教師」のカテゴリーであった。それは回答の中にどちらにも分類することが可能であるような記述があったからである。本稿では、このような場合、「教師は」と主語に明記されている時やまた教師について記述がなされている文脈中の意見であれば、「教師」のカテゴリーに分類した。しかし、このことは、「教師」と「授業」のカテゴリーが非常に緊密に関連しあっていることを意味している。

カテゴリー設定の後、一人の筆者が全記述を分析して、各々のカテゴリーへの回答頻度を調べた。もう一人の筆者は、回答の30%を分析した。二人の分析者の結果の一致度は、86.3パーセントであった。

### 3. 分析結果

#### (1) 統計的データから

分析結果にはいる前に、回答者の属性について簡単に触れておこう。表1に示しているように、回答者総数は371人で、性別には男性が272人、女性が94人（なお若干の性別不明者がいる）で、全体の4分の3が男性である。年齢は24歳以下が21.1%、25歳から29歳までが36.3%、30歳以上が42.5%と、比較的高い年齢の者が多い。それは大学院生が55.8%と半数以上を占め、学部生が12.4%しかいないことによる（残りの31.8%は研究生であった）。自国での最終学歴は大学卒が53.2%と最も高く、大学院修士課程以上の者が29.0%でこれに次いでいる。来日前の母国での身分は、最も多いのが「大学教員・研究者」で全体の28.4%を占め、大学院生であった者が17.8%で第二位である。出身地域ではアジアが最も多く、全体の81.2%を占める。国籍別には、最も多いのが香港台湾を含めた中国で、韓国、マレーシア、インドネシアと続く。欧米・オセアニアの出身者は9人に1人の割合で少ない。このように、回答者はアジア地域の出身者が圧倒的に多いが、この比率は日本に留学している外国人留学生全体の比率とほとんど同じである。

まず、留学生にこれまで日本の大学で経験した最も「よい授業」がどのような特性をもっていたかについての質問を分析した結果を検討しよう。その質問は、以下のようにになっている。「あなたが日本の大学で経験した授業の中で、一番『よい』と思う授業を頭に思い浮かべて下さい。次の項目を読んで、その授業について当てはまるものを右の回答欄に書き入れて下さい。」に続いて、22の質問項目が列挙され、「はい」または「いいえ」で答えるようになっている。

表1 回答者の属性

性 別		年 齢			現 在 の 身 分			自 国 での 最 終 学 歴		
男	女	24 歳 以 下	25歳以上 29歳以下	30 歳 以 上	学部生	研究生	大 学 院 生	高校卒業・ 大学中退	大 学 卒 業	修士修了 以上
272 (74.3)	94 (25.7)	78 (21.1)	134 (36.3)	157 (42.5)	46 (12.4)	118 (31.3)	207 (55.3)	66 (17.7)	198 (53.2)	108 (29.0)

来 日 前 の 母 国 での 身 分					滞 在 期 間				
学部生	大 学 院 生	教 員	大 学 教 員 ・ 研 究 者	その他	1 年 未 満	1 年 以上 2 年 未 満	2 年 以上 3 年 未 満	3 年 以上 4 年 未 満	4 年 以 上
62 (16.8)	66 (17.8)	34 (9.2)	105 (28.4)	103 (27.3)	65 (17.5)	96 (25.8)	68 (18.3)	57 (15.3)	86 (23.1)

所 属 学 部		出 身 地 域						
文 系	理 系	中 国	韓 国	マレー シ ア	インド ネ シ ア	その他 ア ジ ア	欧米・ オセアニア	その他
126 (37.3)	212 (62.7)	101 (29.2)	49 (14.2)	40 (11.6)	37 (10.7)	54 (15.6)	41 (11.9)	24 (6.9)

日 本 語 能 力		授 業 満 足 度		異 文 化 生 活 満 足 度	
十 分	不 十 分	高 い	低 い	高 い	低 い
252 (68.5)	116 (31.5)	201 (55.7)	160 (44.3)	202 (55.4)	162 (44.5)

注 上段：人数

下段：割合（%値）

この質問に対する回答の集計結果は表2のようになる。なお、われわれは、かつて学部専門教育について、日本人学生を対象に同じような質問紙調査をしたことがあるので、同一の質問項目については、表の右欄に比率の差の検定結果を示している。数字を比較しながら、留学生からみた「よい授業」の特性を探ってみよう。

まず、留学生が「よい授業」の特性として評価する項目を順に並べると、「参考文献紹介」「聞き取りやすい声」「教師は熱心である」...となっている。上位に位置する項目の多くは、知識伝達上のスキルや教師の授業への熱意に関する事項が多い。参考文献紹介がトップにあるのは、情報の洪水の中で留学生に対するガイダンスの重要性を物語っている。

しかし、留学生が重視する項目と日本人学生が重視する項目はかなり異なっている。留学生が日本人学生よりも有意に高く評価する項目は、「参考文献紹介」「明確な黒板文字」「質問を引き出す」「小テストあり」「グループ討議」である。ここで注目すべきことは、第一に、質問を引き出したり、グループ討議を行うような、授業で教師と学生とのディスカッションが好まれていることである。これは日本人学生との大きな違いである。教師から学生への一方向的な講義が主流の日本の大学でよく見かける授業スタイルとは逆のスタイルが留学生から期待されているのである。また、明確な黒板文字が期待されているのは、日本語によるコミュニケーションが外国人に容易なものでないことを意味しており、日本人の教師としては板書には注意すべきであろう。

表2 留学生から見た「よい授業」の特性

	留学生	日本人	差
参考文献紹介	78.3%	72.7%	>*
聞き取りやすい声	78.3	88.7	**<
教員は熱心である	77.6	92.9	**<
遅刻・休講少ない	77.0	89.2	**<
重要点を強調	75.6	86.8	**<
明確な黒板文字	74.1	64.0	>**
実例図解の引用	69.9	75.3	* <
教員の創造性	64.2	74.0	**<
学生の態度を考慮	60.1	75.8	**<
年間計画	58.4	61.1	
テキストあり	57.6		
質問を引き出す	54.7	37.4	>**
まとまった授業	52.7		
宿題・レポート	52.4		
応用力のテスト	50.8	56.0	
学生への質問	50.6	67.9	**<
教科書中心	45.6	45.7	
冗談を言う	41.0		
出席を取る	38.2		
小テストあり	37.2	28.6	>**
テスト後解説	34.6		
グループ討議	31.4	11.8	>**

注) 数字は各項目に賛成した者の割合である。

\*は5%、\*\*は1%水準で有意な差があることを示す。

次に、回答を専門分野ごとにみてみよう。表3のように、文系と理系の別に見ると、文化系の留学生は特に、教師と学生の相互作用に関する項目を挙げていることが特徴である。理科系は「遅刻

や休講が少ない」を挙げている。また、学生の身分のちがい（学部生・研究生・大学院生）で見ると、研究生は「グループ討議」「学生への質問」「教師の冗談」などを高く評価しているのに対して、学部生は「小テスト」を高く評価している。

表3 所属学部による違い

	所属学部	文系	理系	
	質問項目			
A	2 グループ討議	46.2	22.6	***
	4 遅刻・休講少ない	71.4	81.2	*
	6 学生の態度を考慮	67.5	56.2	*
	7 年間計画を示す	68.3	52.6	**
	8 学生への質問	65.6	43.1	***
	12 教員は冗談をいう	47.9	33.0	**
	14 質問を引き出す	66.4	46.6	***
	18 教員は熱心である	83.6	72.9	*
B	20 聞き取りやすい声	84.9	73.8	*
	1 創造力育成を重視	31.2	20.5	*
	3 授業で討議あり	37.3	18.9	***
	7 教員はまじめである	26.2	16.3	*

カイ2乗検定  
 \* 5%水準で有意  
 \*\* 1%水準で有意  
 \*\*\* 0.1%水準で有意

なお、日本語の出来る人と出来ない人を比較すると、出来る人は「年間計画を示す」「明確な黒板文字」「教師の独創性」を挙げるのに対して、出来ない人は「教科書中心」，「テキストあり」など、教科書に関する項目が多いことが特徴である。授業での教師の発言内容が理解しにくい者は、それだけ、教科書に対する依存が高くなるのかもしれない。

このように、全体的には、外国人留学生からは、授業におけるディスカッション、教師と学生の相互作用が高く評価されている。また、彼らの言語上のハンディキャップから、日本人学生以上に、明確な黒板文字や聞き取りやすい声などコミュニケーション上の基礎となるような事項に留意すべきことが明らかになる。

ここまで質問を個別に検討してきたが、次に22の質問を因子分析し、留学生からみたよい授業の構成要素を抽出し、体系的な分析を行うことにしよう。表4は、因子分析の結果である。3つの因子で全体の分散の52%を説明することができる。第一因子は「集団過程要因」、第二因子は「授業設計要因」、第三因子は「教え方の技術要因」と名付けた。第一因子は、授業中の質問や討議を中心とするもので、日本人学生との比較でも大きな差があった項目が多い。第二因子は、授業の内容にかかわり、第三因子は、声の聞き取り易さや文字の見え易さなど情報伝達上の物理的な事項にかかわるものである。

第一因子として集団過程因子が抽出されたことは、留学生を対象にした授業においては、教師か



ら学生への一方的な知識の伝達でなく、討論を中心にした相互のコミュニケーションがいかに大切かを意味しているといえよう。「よい授業」の特性に関する日本人学生の違いは、ひとことと言えば、教師と学生の相互作用であるといえよう。日本人学生が消極的でおとなしく、授業でも活発な質問をしないことは、我々も経験していることではあるが、この結果は、改めて、外国人学生と日本人学生の授業態度の違いを際立たせたものになっている。

表4 留学生から見た「よい」授業の要因

	質問項目	因子負荷量	カテゴリー	因子名
第一因子	2 グループ討議	0.310	E	集団過程因子 (18.5%)
	6 学生の態度を考慮	0.551	E	
	8 学生への質問	0.664	E	
	10 出席をとる	0.300	—	
	12 教員は冗談をいう	0.321	—	
	14 質問を引き出す	0.714	E	
	15 テスト後解説	0.555	—	
	19 実例図解の引用	0.327	D	
第二因子	9 参考文献紹介	0.599	A	授業設計因子 (17.1%)
	13 まとまった授業	0.422	—	
	17 教員の創造性	0.737	A	
	18 教員は熱心である	0.378	B	
	19 実例図解の引用	0.447	D	
	22 応用力のテスト	0.595	G	
第三因子	5 重要点を強調	0.342	D	教え方の技術 因子 (15.8%)
	6 学生の態度を考慮	0.320	E	
	10 出席をとる	0.494	—	
	11 明確な黒板文字	0.632	D	
	18 教員は熱心である	0.539	B	
	20 聞き取りやすい声	0.740	D	

注 ( ) 内：寄与率

なお、片岡らによる高等教育における授業の仮説モデル(図1)にこの結果を位置づけてみよう。第一因子の集団過程は図のE、教え方の技術要因は図のDに属する。このことは、留学生にとって「よい授業」であるかどうかは、授業のプロセスによって大きく影響されることを意味している。

数量的分析の最後に、留学生の日本の大学授業への満足度を分析してみよう。ここで、授業満足度は「あなたが今まで日本の大学で受けた授業に対する、全体としての印象について、以下の選択肢から一つ選んで、右の回答欄に書き込んで下さい」という質問に対して、「期待以上」「期待通り」を選んだ者を授業満足度が高い、「期待はずれ」を選んだ者を授業満足度が低い、と定義する。クロス分析の結果、授業満足度は、出身地域や所属学部、日本語能力には関係なく、むしろ、表5に示すように、年齢と滞在期間、異文化への満足度に関連している。すなわち、年齢が高く、滞在期間が短く、異文化に適応している者が、日本の大学教育に満足している。

図1 授業のモデル

内 部 要 因	インプット	プロセス	アウトプット
	A 授業設計	D 教え方の技術	F 学力
	B 教師のパーソナリティ	E 集団過程	G 一般（専門）教育
	C 学生の動機		H 学生の意欲
外 部 要 因	授業の時間帯, 授業の履修方法, クラス規模		

注：片岡・喜多村編『大学授業の研究』玉川大学出版部，1989年，23頁。

表5 授業満足度の高い者の割合

年 齢 *			出 身 地 域						
24 歳 以 下	25歳以上 29歳以下	30 歳 以 上	中 国	韓 国	マレー シア	インド ネシア	その他 アジア	欧米・ オセアニア	その他
44.7	52.0	64.1	58.8	69.3	53.7	50.0	46.6	53.5	50.0

所 属 学 部		現 在 の 身 分 *			滞 在 期 間 *				
文 系	理 系	学部生	研究生	院 生	1 年 未 満	1年以上 2年未満	2年以上 3年未満	3年以上 4年未満	4 年 以 上
58.4	54.0	41.3	63.7	55.0	71.0	52.2	57.6	60.0	45.2

日 本 語 能 力		生 活 満 足 度 **	
十 分	不十分	高 い	低 い
55.7	58.2	70.5	37.7

カイ2乗検定

\* 5%水準で有意

\*\* 0.1%水準で有意

## (2) 自由記述意見の分析結果

自由記述質問への回答を内容分析し、日本の大学授業に対する留学生の肯定的・否定的意見を、それぞれ7つのカテゴリーに分類した。その結果、分類された意見総数は延べ564であった。そのうち肯定的意見は151で全体の26.8パーセント、否定的意見は413で全体の73.2パーセントを占めていた。肯定的、否定的意見をそれぞれのカテゴリーに分類すると、表6、表7のようになる。

### a) 肯定的意見

まず肯定的意見の分析結果を見てみよう。肯定的意見の56.3パーセントが「授業」について述べていた。15.9パーセントが「教師」に関して、そして13.2パーセントが「設備」の良さについて記述していた。

日本の大学の授業のよい点として、授業方法が「自由な雰囲気」で「演習やゼミがある」こと、「実際的で応用重視」であるなどが頻度の多い項目としてあげられている。授業の内容に関しては、「速く最新の情報が講義される」と「内容のレベルが高い」ことが指摘されていた。カリキュラムについては、「授業科目が多く選択の自由」があって良いと評価されていた。また「設備」

の категорияでは、「設備が整っている」こと「資料や図書が豊富である」ことが評価されていた。

これらの授業と設備に対する肯定的意見の傾向をさらに出身地域別に分類すると、アジアの途上国からの留学生が、日本の大学の授業方法、内容、カリキュラム、設備について高い評価をしていることがわかる。また、所属学部という属性による分析を加えると、「演習やゼミがある」ことは、文系、理系の区別なくアジアの留学生から肯定的評価がなされている。これに対して、「実際的で応用重視」と「最新の情報を速く」知ることができるを高く評価しているのは、アジアの理系の学生である。「設備」に関しても、アジアからの留学生が高い評価をしているが、「設備が整っている」と満足を表しているのは理系の学生に多く、「資料や図書が豊富でよい」と評価するのは、文系の方である。

一方、授業方法が「自由な雰囲気」で、カリキュラムに「科目が多く選択の自由がある」もアジアの留学生だけから評価されている。しかし、これは詳細に検討すると、高い評価をしているのは、文系理系に関係なく中国からの学生である。中国からの理学部の大学院生は、「知識や技術を身につけたければ、学部の授業よりも大学院へ進学すべきである。日本の大学のよいところは、自由な雰囲気とめぐまれた設備。豊かすぎて研究費の使い方が荒いことは、多少もったいない感じがする」といささかの批判をも加えながら、研究のやり易さを述べている。

「教師」に関する肯定的意見は、数は多くない。しかし、長所として「知識が多方面で学識がある」「よく指導する／近づき易い」「親切」などがあつた。これらは主に、アジア、欧米・オセアニアの学生たちが記述していた。頻度は、理系の方が少し多かったが、文系からも意見が述べられていた。タイからの理系の学生は「(留学の)多くが教授の質にかかっている、良い教授に出会えると全てが上手く行く。殆どの教授は良いのだが、何人かは全くそうではない」と記述していた。「その他」の categoryの中には、「日本の教育は一流」との高い評価を下す者もいた。

日本の大学の授業に対する肯定的記述をまとめてみると、意見の主な項目は、圧倒的にアジアの留学生から寄せられている。深く専門知識の学べるゼミや演習、大学院の授業は、専門の区別なく受け入れられている。さらに、アジアの理系の学生が設備をも含めて授業を高く評価する傾向がある。これは途上国の学生たちが、技術開発の進んでいる日本で学ぶことの長所を認めていることを表しているといつてよいであろう。そして、中国からの留学生が、日本の大学の「自由な雰囲気」「科目が多く選択が自由」であつてよいと把握していることは、異文化で自国の大学と異なる便利でよいシステムに出会つたことを表しているようである。

#### b) 否定的意見

次に否定的記述の分析結果についてみよう。否定的記述の38.3パーセントが「授業」そのものについての短所を記したものである。19.4パーセントが「教師」に関する否定面をいろいろな角度から書いていた。肯定的記述と大きく異なる点は、日本人学生の資質や授業に対する態度を否定的に評価した者が約14.5パーセントあつたことと、大学の教育制度に対して約12.1パーセントの意見があつたことである。さらに、回答中に、留学生教育や受け入れに関連して批判や要望を

述べた者が約9.2パーセントあった。設備に関する否定的記述は、1.7パーセントとわずかで、満足しているか、あるいは他の問題と比べると許容の範囲内にあることを示しているようであった。

表6 肯定的意見

カテゴリー	内容	合計	出身地域					専門分野					
			ア 計*	中 国	韓 国	欧 米・オ セアニア	ラ テン ア メリ カ	ア フリ カ ・中 東	文 系	理 系	他	不 明	
授業 (85)	授業方法 (52)	自由な雰囲気	9	9	6	0	0	0	0	4	4	1	0
		演習やゼミがあること/ゼミは授業効率が高い	8	7	3	3	1	0	0	3	4	0	1
		実践的で応用重視/実習実験が多い/資料重視	8	8	5	1	0	0	0	0	6	0	2
		創造力養育演習+院授業/学生の創造力育成重視	6	6	3	1	0	0	0	4	2	0	0
		研究室+授業での討論/研究室での活発な研究	5	5	3	2	0	0	0	1	1	0	3
		全般的に良い	4	4	0	0	0	0	0	1	3	0	0
		視聴覚教育をよく利用する	2	1	0	0	0	1	0	2	0	0	0
		ゼミ+ラボを通して教師学生が親密になる	2	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0
		生き生きしている/活気がある	2	2	2	0	0	0	0	0	1	0	1
		多様な授業形態	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0
		自己発表の機会が多い	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
		学生に調べさせ独自性を持たせる	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0
		よいレポートを書く訓練	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
		参考文献を紹介する	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0
		最もよくできる学生中心に授業	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0
	授業内容 (19)	速く最新の情報が講義される	8	8	4	0	0	0	0	0	7	0	1
		内容のレベルが高い	4	4	1	1	0	0	0	1	3	0	0
		広い範囲/深い専門知識	3	3	1	1	0	0	0	0	2	0	1
		自分の目的に合う	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0
		研究史の整理がすばらしい	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0
カリキュ ラム(11)	授業科目多く選択自由がある	9	9	8	0	0	0	0	4	4	0	1	
	よく計画されている	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	
	カリキュラムがよい	1	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	
教師 (24)	テスト (3)	2	2	2	0	0	0	0	0	2	0	0	
	単位が簡単にとれる/易しく広い テストのため登録の必要なし	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	
学生への 態度(9)	資質 (9)	5	4	4	0	1	0	0	1	4	0	0	
	知識が多方面+充分/学識がある	2	1	0	1	1	0	0	0	2	0	0	
	まじめ/人格がある	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	
	教育熱心	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	
	最新の研究成果	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	
	よく指導する/近づき易い	3	1	0	0	2	0	0	1	2	0	0	
授業への 態度(6)	親切	3	1	0	0	1	1	0	2	1	0	0	
	ユーモア	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	
	学生の意見を取り入れる	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	
	学生の指導をしないこと	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	
設備 (20)	準備がよい	2	1	0	1	1	0	0	0	2	0	0	
	授業に真面目・最善を尽くす	2	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	
制度 (4)	専門を自信もって授業する	1	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	
	時間どおりに教室に現れる	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	
留学生指導 (2)	設備が整っている	12	11	6	0	0	0	1	3	8	1	0	
	図書館がよい(図書豊富)	8	7	5	1	1	0	0	6	1	0	1	
学生 (3)	教養部の存在/教養で専門以外を学べる	2	2	1	0	0	0	0	0	2	0	0	
	集中講義制度がよい	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	
その他 (13)	教養と専門のバランスがよい	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	
	教員と個人的につき合えること	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	
学生 (3)	チューター制度はよい	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	
	熱心/親切	2	1	0	0	0	1	0	1	1	0	0	
	自主独学能力に優れている	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	
	院では個性と独創力を育成/活発な研究	3	2	1	1	1	0	0	0	0	0	3	
	独学の時間が有り自立能力を育成	2	2	1	0	0	0	0	0	2	0	0	
	日本の教育は一流	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	
	人間関係に気を使わず学問に専念できる	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	
	サークル活動がよい	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	
	研究方法で啓発される	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	
	食堂はきれいで安い	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	
	院では教官学生間の競争がある	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	
	先輩の指導が受けられる	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	
	職員が親切	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	

注) \*アジア圏全体の数であり、中国と韓国は数が多いため、特にとりあげた(内数)。

授業について、留学生が最も批判的であるのは、授業方法で「教師の一方向的授業／議論が少ない」ことである。次に、「思考力創造力の訓練がない」「単調／退屈／おもしろみがない」と続く。この上位3項目を加えると、これだけで授業カテゴリーの33.5パーセントを占める。授業内容では「理論的授業が少ない／基礎理論を重視しない」「理論多いが実際と応用少ない」「授業内容が定まっていない／内容が低い」が頻度の高い意見であった。

次に、これらの授業に対する批判を、出身地域、所属学部の別に分析すると、「授業方法」での主な批判項目は、殆ど世界のどの地域の学生からも文系理系の区別なく、低い評価が下されている。ヨーロッパからの一学生は、「(授業で)討論が全くない...このため、日本人学生は物事に柔軟に対応することができない」と書く。アジアの学生は、「大学の授業に出なくとも、教科書を買って、友だちから試験の情報を聞けば簡単に単位が取れるというようなことが起こらないように、授業のやり方を改善すべきだと思う」と記述する。そして米国や中国の学生から、「授業が役に立たなくつまらない、独学以外にない」「自分で勉強する自主性が身につきました。仕方がないから」という意見が寄せられていた。

「授業内容」に関する意見は、地域別には、アジアと欧米・オセアニアからが多かった。しかし、学部別にはこれらの意見は大半が理系のものであった。特に「理論的授業少ない／基礎理論を重視しない」は、理系の学生だけからの意見である。これは細かくみると、特に農学系に集中していることが特徴である。日本の大学の理工系の授業は、実験などの方が多いのであろうか。

他に「テスト」のカテゴリーで頻度は高くないが、欧米やアジアの区別なく、文系理系の双方からの否定的評価として、「簡単に単位を出しすぎる」があった。

次に「教師」のカテゴリーについて見てみよう。教師の「学生への態度」として、「学生に無関心／学生に関係がない／参加を奨励しない」が第一位にあげられている。そして「権威主義的／質問させない／質問に答えない」が続く。「授業への態度」では、「教育不熱心／興味がない／不まじめ」「遅刻や無断休講が多い」が批判の対象になっている。教師の「資質」では、「研究中心主義」が低い評価を受けている。

これらの傾向を出身地域と所属学部の属性別に分析すると、教師が学生に「無関心」であることは、アジア、欧米・オセアニア、アフリカ・中東の文系理系双方の学生から批判されている。これは「授業方法」での教師の一方向的講義に対する意見を、「教師」カテゴリーの側で把握したものである。教師の「授業への態度」「資質」への意見は、主にアジアの学生たちからであった。しかし、これらを学部別にみると、「研究中心主義」は文理双方より意見が出されていたが、「教育不熱心」は理系から多かった。そして「遅刻や無断休講」は、文系の学生の方が多かった。

留学生の教師に対する意見を紹介しておこう。中国の学生は、「日本の大学は余りにも適当すぎる。先生は遅刻も早退もできるし、授業時間も先生の意見で適当に変えることができる。先生の一言で休講にできる。授業内容も決まらず、授業の前に予習することも授業の後に復習することもできない...我が国の大学では起こり得ないことである。いつでもでなくても、一度でも処分を受けるのである。」と記述している。米国の学生は、「日本の教授は学生の関心を起

表7 否定的意見

カテゴリー	内容	合計	出身地域							専門分野						
			ア 計	シ 中国	ア 韓国	欧米・オ セアニア	ラテン アメリカ	アフリカ ・中東	不 明	文 系	理 系	他	不 明			
授業 (158)	授業方法 (105)	教師の一方的授業/議論少ない	27	20	6	3	5	1	1	0	9	15	3	0		
		単調/退屈/面白くない/プリント棒読み	13	6	2	0	7	0	0	0	7	5	1	0		
		思考力創造力の訓練がない	13	10	4	0	2	1	0	0	6	6	0	1		
		一般的に授業のやり方よくない/下手	10	7	3	0	3	0	0	0	5	3	0	2		
		学生の積極性を引き出さない/参加すめない	8	7	2	1	1	0	0	0	5	2	0	1		
		教員学生双方に授業への動機低い	5	4	2	0	0	1	0	0	2	2	0	1		
		体系的計画的教授でない	5	3	2	0	1	0	1	0	1	1	0	3		
		視聴覚機器を活用してしない	4	3	1	0	1	0	0	0	2	2	0	0		
		レポートや宿題、テストが少ない	4	1	0	0	3	0	0	0	2	2	0	0		
		ゼミ制度はよくない	3	2	1	0	1	0	0	0	1	2	0	0		
		実習演習少ない	3	3	1	0	0	0	0	0	0	3	0	0		
		英文和訳の授業	3	1	0	0	0	1	1	0	1	2	0	0		
		意見発表の機会少ない	2	2	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0		
		テキスト古い/教科書がない	2	2	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0		
		授業で英語使い過ぎ/英語の教科書多過ぎ	2	2	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0		
		時間一杯授業しない	2	2	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0		
		資料は講義と無関係	2	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	0		
		暗記中心	2	2	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0		
		外国語授業方法よくない/話せない	2	2	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0		
		原文での授業が不足	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0		
		良き設備を十分に活用しない	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0		
		授業内容 (38)		理論的授業が少ない/基礎理論を重視しない	10	9	4	0	1	0	0	0	10	0	0	0
				理論多いが実際と応用は少ない/もっと実際の授業を	8	5	0	0	2	0	1	0	2	4	2	0
				授業内容が定まっていない/内容が低い	7	5	4	0	2	0	0	0	2	4	0	1
				自分の目的に合う(関心のある)講義がない	5	2	0	0	1	1	1	0	1	3	1	0
				講義概要と実際の授業が無関係	2	1	1	0	1	0	0	0	1	1	0	0
教える知識が狭い/古い	2			2	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1		
教養の授業内容が劣る	2			2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0		
授業でカバーすることが多過ぎる	1			1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0		
専門分化し過ぎ	1			1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0		
テスト (8)				簡単に単位を出しすぎる	6	2	0	0	3	0	1	0	2	3	1	0
設問が不明確		1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0			
休み明けに試験をする		1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0			
カリキュ ラム(2)		工学部の人にも人文を	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1			
		通念の科目が多すぎる	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0			
教師 (80)	学生への 態度(44)	学生に無関心/学生との関係がない/参加を奨励しない	19	14	6	1	4	0	1	0	6	12	0	1		
		権威主義的/質問させない/質問に答えない	9	5	2	0	3	1	0	0	5	4	0	0		
		学生への研究指導が自由放任	8	7	3	0	0	0	1	0	4	3	1	0		
		学生への厳しさが足りない	4	3	2	0	1	0	0	0	1	3	0	0		
		研究テーマを教師が選ぶ	2	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0		
		教師と学生の人間関係が複雑 ユーモアがない	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0		
	授業への 態度(23)		教育不熱心/興味を示さない/不真面目/積極性がない	14	13	6	1	1	0	0	0	2	9	1	2	
			遅刻や無断休講多い	7	6	4	0	1	0	0	0	3	1	2	1	
			わかりやすい授業をしない	2	2	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	
			実質 (13)	研究センター主義	6	6	2	1	0	0	0	0	2	4	0	0
責任感薄い/良い制度の運用力無し	5	5	5	0	0	0	0	0	0	4	0	1				
専門知識無し/知識が狭い	2	2	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0				
学生 (60)	授業への 態度(32)	授業に参加しない/出席率低い	7	3	1	0	3	0	1	0	2	4	1	0		
		教師学生とも議論しない	7	5	1	1	0	1	1	0	2	5	0	0		
		居眠りしている	7	3	0	0	1	0	3	0	1	5	1	0		
		質問が少ない/意見を述べない	5	1	0	0	1	2	1	0	2	3	0	0		
		単位をとるために授業に出席	3	1	0	0	1	0	1	0	1	2	0	0		
		授業中うるさい	2	0	0	0	1	1	0	0	2	0	0	0		
実質 (28)		甘い単位の授業を取る	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0		
		積極性がない/勉強しない	21	12	7	1	7	1	1	0	10	5	5	1		
		学生の水準が低い	4	3	1	0	1	0	0	0	2	1	1	0		
		教師と親密でない	2	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	0		
社会主義者が多い	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0				
制度 (50)		授業時間が長すぎる	12	6	2	1	5	0	1	0	6	6	0	0		
		入学までは厳しいが遊んで卒業可	12	4	1	2	7	1	0	0	4	5	3	0		
		クラス規模が過大	7	5	2	2	2	0	0	0	3	1	1	2		
		院で実験+研究に重点置きすぎ/理論+講義が必要	4	3	0	0	0	0	1	0	1	3	0	0		
		院の単位制度	4	3	2	0	0	1	0	0	2	2	0	0		
		出欠が自由	2	1	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0		
		四年以内での卒業を認めない	2	1	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0		
		四年間の勉強に体系性がない	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0		
		教養課程が長すぎる	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0		
		研究室制度良くない	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0		
		自己学習の時間がない	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0		
		院で小グループの研究がない	1	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0		
		学科間で情報交換+協力が無い	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0		

		研究費の使い方に無駄がある	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
留学生	授業	教師が英語下手／英語の授業を／英語外国語の教材を	9	7	0	0	1	0	1	0	0	8	1	0
(38)	(28)	日本語の授業を／口頭練習が少ない	5	4	1	0	0	1	0	0	0	4	1	0
		留学生に対する教師の配慮不足	5	1	0	0	1	0	3	0	1	4	0	0
		教師は留学生に無関心	3	1	1	0	0	0	2	0	1	2	0	0
		日本語が分からない／来日前に日本語テストを	3	3	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0
		留学生に第三外国語は酷	2	2	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0
		私費留学生への特別プログラムがない	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0
	指導	留学生向けに関連情報文献を	3	1	1	0	1	1	0	0	2	1	0	0
	(7)	日本人学生と留学生を同等に扱ってほしい	2	2	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0
		研修生にいい指導教官をつけない	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
		指導教官がゼミや参加授業を決める	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
	入試・学位	院入試の時本校生や推薦教授の力に影響されること	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	(3)	文科系の学位取得が困難	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
		留学生には大学入試が難しい	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
設備		設備が良くない(研究施設+図書+タイプ等を含む)	4	1	0	0	2	1	0	0	2	2	0	0
(7)		教室が狭い／古い／汚い	3	1	0	1	2	0	0	0	3	0	0	0
その他		外国人への差別／金髪留学生とその他留学生を差別	6	4	0	1	2	0	0	0	2	4	0	0
(20)		日本の大学は規制が多過ぎる	2	1	1	0	1	0	0	0	1	1	0	0
		学生は英語・外国語が使えない	2	0	0	0	2	0	0	0	0	1	1	0
		日本の大学の国際化遠い／国際交流促進を	2	1	1	0	0	0	1	0	0	2	0	0
		教師が学生に自著を買わせる	2	2	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0
		大学によい人間がいない	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0
		下宿問題	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
		もっと外国人教師を雇うべき	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
		日本の大学は日本人学生用に設立されている	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
		生活費が高い	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
		院生が「学生」として扱われる	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0

こさせるようなことはしない。各コースに課せられている学習量からもこれは明白なことである。率直に言って、日本の大学での四年間は時間の無駄である。同様のことが、二年間でやってしまえる」と記す。

「学生」のカテゴリーの分析結果をみると、次のようになる。否定的意見の第一位は、「積極性がない／勉強しない」で他の意見よりも群を抜いて頻度が高い。「授業への態度」の上位三項目は、「教師とも学生とも議論しない」「居眠りしている」「参加しない／出席率低い」である。これらの意見は、授業中に教師や学生同士の相互作用がないことを、このカテゴリーで学生の側からの責任を問うたものである。特に、「積極性がない／勉強しない」は、文系の方がやや意見が多いが、所属学部の区別なく、全ての地域の学生から記述がなされている。肯定的意見に日本人学生が触れられているのが、わずか2パーセントであるので、日本人学生への批判は厳しいと受け取ってよいようである。

南米コロンビアから生化学を学びにきている学生は「学生教師双方に、全般的に(授業への)意欲が欠けていると感じる」と記す。またマレーシアから来日し総合科学を学ぶ学生は、「日本の学生は、学校で勉強よりも社交生活を楽んでいるようで、学校は社交場か眠る場所のようになっている。」と否定的評価をする。また、特に頻度は高くないが、授業中に学生が居眠りをすることは、失望の目でみられている。中には、その学生の態度を知っていて何も言わない教師がいることに強い驚きと落胆を表す留学生もいた。

大学の教育制度についての意見はどうであろうか。「授業時間が長い」「入学までは厳しいが、

遊んで卒業」「クラス規模が過大」が挙げられる。これらも出身地域や専門別の差はなく、批判点として指摘されている。イタリアからの文学部の学生は、「時間が長すぎる。イタリアの場合は50分。研究者の意見では、人間の聞く能力、つまり疲れるまでは20分。特に外国人にとっては、母国語じゃない言葉を聞くのは大変な努力がいるから、もっと速く疲れる。」と訴える。

次に肯定的意見では二項目しか出ていなかった「留学生」カテゴリーを見よう。主な意見は、日本語のできない留学生からであろう。「教師は英語が下手／英語の授業を／英語・外国語の教材を」「日本語の授業を／口頭練習が少ない」が批判と要望として書かれている。これらは非漢字圏のアジアの学生とアフリカの理系の学生から記述されたものである。

「その他」のカテゴリーでは、「外国人に対する差別／金髪留学生とその他の留学生を差別」する日本人に対する批判がある。インドから自然科学を学びにきた学生は、「時にはひそかにされるのだが、日本人からの孤立ということは苦痛です」と書く。このカテゴリーにはまた「院生が“学生”として扱われる」という意見がある。これはオランダの医学生の記述であるが、異文化の中で人間関係のあり方が違うのを経験し、それを否定的にとらえている例である。欧米でも教師が専門の領域で権威であることに変わりはないが、一個の人間としては対等で、大学生ともなれば、イコールな大人として扱われることが多い。そして大学院生なら研究者としても遇されるのが普通である。日本での教師と学生のタテの関係が、母国でのそれより広い範囲に及ぶことに戸惑いを感じているようである。さらに、「その他」のカテゴリーには、「日本の大学は国際化に遠い／国際交流推進を」という否定的意見、要望が記述されていた。

自由記述で留学生たちが、日本の大学授業の否定的側面として取り上げた最も重要なことは、教師と学生、及び学生同士の間にも相互作用がないことである。これについては、出身地域、所属学部の別なく、留学生全体の傾向として出されてきている。またこれは統計的データの分析の結果とも一致するものでもある。その上、この教室で相互作用がないことに関して、留学生は、教師、学生両者の側からの授業に対して積極的に取り組む姿勢のなさを指摘している。教育制度では、「授業時間の長さ」と共に、「入学までは厳しいが遊んで卒業」があった。ここでも勉強の仕方が受動的であると見られる日本人学生を、制度が支えていると解釈されているようである。

## 考 察

2つの大きな質問と自由記述により、外国人留学生にとっての「よい授業」の規定要因と、彼らの日本の大学授業観を分析した。調査結果の知見をまとめると、次のようになる。

### (1) 全体的傾向

1. 「よい授業」の規定要因の分析結果は、日本人の専門課程の学生の意見と比較された。留学生は自分たちが教師やクラスメートと討議をしたり、質問できる授業を「よい」とみなす主体的能



動的な傾向があるのに対し、日本人学生は、教師が教えることに熱心であったり、自分たちの態度を考慮してくれたり、質問を投げかけたりすることを「よい」とする受動的傾向があることが判明した。

2. 「よい授業」に関する質問項目を因子分析した結果、3つの因子が抽出され、留学生は授業で単に知識を伝達されることよりも、教師との相互作用、即ちそのプロセスを非常に重視していることが明らかになった。
3. 自由記述意見の分析結果からも、出身地域の差はなく、留学生より、授業方法が「教師の一方的授業」で「討論のない」ことが否定的評価を得ていることがわかった。
4. 第二の質問と自由記述の分析の結果、演習やゼミ、大学院の授業は「効率が高い」「創造力を養っている」と高い評価が下されていた。
5. しかし、教師に対しては、まじめで学識があるとの肯定的評価があったにもかかわらず、「学生に無関心」で「研究指導が自由放任」であると、教育者としての側面がほとんど出身地域の差なく批判されていた。
6. 自由記述には、日本人学生に対して、出身地域の差なく「積極性がなく勉強しない」や「居眠り」を授業中にする者がいるという批判があった。

## (2) 属性別傾向

1. 所属学部別傾向として、文系の留学生たちが教師とのディスカッションを重視しているのに対して、理系の学生は授業内容の理解を正確に確認していける授業を重視していた。
2. 日本語のできる留学生は、教師が年間計画を示したり、明確な文字を黒板に書いたり、独創性のあることを「よい」授業の要因とする傾向があるのに対し、日本語のできないものは、教科書への依存度が高い傾向がみられた。
3. 「授業満足度」は、年齢が高い者や研究者、大学院生、また異文化生活に満足している者ほど高く、滞在期間が長くなるほど低くなることが判明した。

本研究で明らかになった最も重要な知見は、留学生は主体的・能動的な学習や授業での教師との相互作用を重視する傾向があるのに、日本での授業は逆で教師からの一方通行であり、この授業方法に対して批判が集中していたことである。演習やゼミ、大学院での授業が評価されていることから、授業中に教師や仲間を知ることができ、ディスカッションをすることができる授業を評価していることがわかる。留学生にとって、授業は新しい情報、知識を受動的に得るだけの場ではなく、教師や学生同士の討議を通じて、そのプロセスを経ることにより知識を確実に自分のものにする場であるべきという考えが表わされている。この授業観があるために、教師が学生に無関心であったり、研究指導をせず放任しておくことや、学生が学生としての責任を果たさないことに否定的評価を下している。これらの結果が出身地域の差なく、世界のあらゆる地域の学生たちから提出されていることが重要な点である。

人類哲学 (anthropological philosophy) 研究者の Barry によれば、大学の授業では次の6つのことを学生たちに学習させねばならない。<sup>10)</sup>

1. 専門用語, 事実, 理論, 方法論, 原論 (知識, 情報といわれるもの) の学習

2. 学習した知識を理解し、自分自身の言葉で説明や解釈ができること。
3. 学んだことを具体的に、またそれに合う状況に応用すること。
4. 学習内容をその構成要素に分解できること、すなわち主題を分析する力。
5. 学習したことを教科の全体へ統合する能力
6. 知識を目的や内外の基準に照らして批判的に評価すること。

これらの授業目的は、学生たちが授業で単に知識や情報を得るだけでなく、応用力、分析力、知識の統合力及び判断力までも啓培されなければならないことを意味する。日本の大学授業においても、個々の授業、演習、ゼミを通して学生たちにこのような総合的な知力を培わせることを目標としていると考える。

「優れた教授法」を分析したローマンは、ほとんどの大学の授業はグループ学習を基礎とし、講義と討論の組合せにより成り立っているという。彼によれば、講義は授業の一形態に過ぎず、その上、講義のやり方にも説明式、刺激式、講義・実演式、質疑応答式、討論式、朗読式の7つのタイプが存在する。<sup>11)</sup>日本の教師もこれらの形態を選んだり、組み合わせたりしているに違いない。しかし、調査結果から推測すると、圧倒的に多いのは説明式講義が多く、授業で討論が行われることは非常に少ないようである。説明式講義はよく構成されれば、情報や要点、結論を多人数の学生に効果的に提供することができ、生産的で高いレベルの授業を行うことが可能である。しかし、留学生の反応を見ると、そのような観察は少ないようである。

授業中の討論は、学生たちに考える能力を発達させる機会を与えるといわれている。<sup>12)</sup>討論を通じて学生は、自分の感情的な偏向や価値観を明らかにすることができる。また講義で得た知識をどう評価すべきかを考える訓練を行うことができる。さらに討論を通して、講義だけでは達成が難しい学生と教師、或は学生同士の親密さ、自律性、動機づけなども育成することができる。授業に討論を欠くことは、こういったことを学生が学ぶ機会を失ってしまうことになる。「教師中心」の一方的講義のみでは、Barryの挙げる授業目的も、日本の大学教育が目標とすることも、限定された部分しか達成できない。教師からの講義を聞くだけでは、学習の可能性の半分以上が閉ざされていることになるのである。その上、教師から情報を与えられるだけの学習環境で育成される学生は、受動的で創造性がなく、物事に無感動、無関心になって行くのではないだろうか。

喜多村は、日本の大学の授業が教師の一方的講義に依っている理由を次のように説明する。<sup>13)</sup>日本の大学は明治初期に日本の独立を維持し近代化を推進する手段として設立された。このため、大学は建国のためのエリートが学ぶ「最高学府」で、そこには「教育の場」というよりむしろ「学問の場」であった。したがって、教師は自分の学問成果を提示すれば、学生は自ずから自学自習して行くものと解されていた。つまり、大学で教師が学生に「何をいかに教えるか」というカリキュラム論や教授法にそれほど配慮する必要がなかったのである。しかし、今日大学生の数は増え、彼らの質も役割も明治のころとは変わり多様化している。であるのに、この旧制帝国大学にあてはめられた古典的ともいべき大学観、教授法がいまだに存在しているのである。片岡たちも、欧米に比較して教育方法の研究が立ち後れている原因として、日本の大学における研究機能の偏重と、大学教育あるいは大学の教育方法の立ち後れをあげている。<sup>14)</sup>

伝統的に大学の教師は教授法を習わない。意識的、無意識的に自分の大学時代の教師たちをモデルに授業を進める。しかし教えている学生たちは自分の学生時代の仲間とは違うのである。

世界各地域の留学生たちが、教師とも学生同士とも相互作用のできる授業を望んでいることは、現在、日本の大学で採用されている教授法が、留学生のニーズに適合していないことを物語っている。それはまた、日本の大学で学習の機会が最大限に活用されていないことをも意味している。授業中に十分な相互作用が行え、授業の目的に沿った多様な教授法が採用されることは、ひとり留学生のみならず日本人学生にとっても学習の機会を大きく増幅させることになると思う。

専門分野別の分析の結果、「よい」授業の特性が所属学部別に違っていることが判明した。これは、学問そのものの性格が異なり、学問文化も異なるからであろう。文系で、留学生が教師とのディスカッションを重視しているのは、文系学問が人間の精神活動の産物や社会事象を研究対象としていることを反映している。これらの学問では、知識内容は人間の立場が異なれば異なるし、事象そのものも時と場所によって異なる。しかも因果の連鎖は複雑で、解釈には個人的な変異が大きい。したがって授業では、一斉授業よりも学生と教員の討議を重んじることが必要となる。他方、理系系では、現象の因果の連鎖は理論的に説明され、数式を使って表現されることも多い。知識は体系性を持ち、教授される知識も教科書化されている。学部段階や大学院の初期の段階では、既存の知識体系を順序だてて学生に内面化させることが必要である。だから理系の留学生は、内容の理解を正確に確認していける授業を重視していることになる。留学生の統計的な分析結果では、このような文系と理系の違いが明確に出ている。

日本語能力の十分な学生と不十分な学生とでも「よい」授業の要因が異なっていた。ここで語学に関する要因のみに焦点をあててみると、日本語能力の不十分な学生には、教科書への依存度が高い傾向がみられ、十分な学生は「明確な黒板文字」を「よい」授業の一要因としてあげていた。語学能力十分な者と不十分な者とは、授業で与えられる情報を理解するのに、依っているところが違うのであるが、いずれも書かれた知識・情報を「よい」授業の一要因としてみなしている。このことは、クラスに留学生がいる場合、教師は外国語で高等教育に挑戦する者が授業を理解しているかどうかなど、配慮 (empathy) する必要を示しているようである。これはまた、留学生教育の質を高めるためには、来日前からの日本語教育の充実を図らねばならないことをも示唆しているようである。

「授業満足度」は年齢の低い者や学部生の方が低くなる傾向にある。この結果は、日本の大学教育は大学院よりも学部の方が問題が多いことを意味しているようである。また滞在期間の長い者ほど満足度が低いことは、注目すべきである。長期滞在者の方が短期滞在者に比べて経験も深く、異なった角度からまた冷静に日本の大学の授業を評価することができると考えられるからである。現在の日本の大学教育は、留学生にとって、かなり深刻な問題を含んでいると思われる。

「授業満足度」に出身地域による大きな違いはないが、留学動機と密接に関連しているようである。自由記述の中で、欧米・オセアニアの学生たちは、否定的意見を多く書き、欧米を留学の先進地域として教育のあり方を見習うべきであると記述している者もあったが、彼らの授業満足度は低くない。これは途上国からの留学生の中には、日本が留学の第一志望でなかった者もいるであろう

が、欧米・オセアニアの学生の多くは、日本文学、日本学専攻が多く、彼らの留学目的は日本で学ぶことによって達成されるためであろうことからとも考えられる。フランスからのある留学生は、「この大学は私の専門を学ぶのに世界で最高の場所」とも書いて高い満足度を表している。このように、授業満足度と留学動機が関連する可能性があることは、留学生の来日前に、日本の大学に関する正確な情報を提供する必要性を意味しているようである。

出身地域あるいは出身文化別に授業観が異なることは、すでに報告がなされている<sup>15)</sup>。われわれの今回の分析からも、一般化はできないが、アジアの留学生たちが日本人教師の「研究主義」を否定的に観ていることや、主に中国からの留学生が、日本の大学授業の雰囲気は自由で、選択科目が多いことを評価している等、いくつかの顕著な傾向が見られた。このように出身地域別に授業観が異なることは、留学生を受け入れる時、教師が個々の学生の出身地域の文化、思考法、過去の学習方法、現在の学習目的などを知らなければならないことを示唆している。クラスに異文化からの学生がいる場合、学生の価値観、思考法、過去の学習方法が大幅に異なることがある。そのため、教員は少なくとも、このような文化的な差異が存在することを認識しておくことが必要である。

今回のわれわれの調査から明らかになったことは限られているが、結果を総合すると次のようになる。大学の「よい」授業形態は、専門分野の学問性格により異なるであろうが、全体としては、留学生たちは教師との相互作用を通して、個々のアカデミックな目標を追求することを「よい」と考えているということである。換言すれば、留学生は教師が単に情報を伝達してくれる人としてだけでなく、彼らの一人ひとりを把握し、相互に反応しあえる先達であり、それが授業の場を実現されることを望んでいるようである。このような留学生による「よい」授業観は、そのまま日本人学生にも応用が可能なようである。

今日、日本の高等教育の国際化が模索され、留学生教育の問題が具体的解決を求めて論議されている。留学生の受け入れに当たっては、彼らの来日前からの制度的な問題の検討と整備がなされねばならない。しかしそれ以上に、教育理念、教育方法、カリキュラム、教育の質といったアカデミックな面での改善も必要である。日本の大学の授業が、日本人学生にとっても異文化からの学生にとってもよいものにならない限り、日本の大学の国際化は、その本質まで改まったものにはならないのではないだろうか。

本研究の規模は小さく、対象者は国立大学の限られた留学生である。留学生たちの日本の大学授業への適応過程をより明らかにするために、将来彼らの経済事情や対人関係、物理的環境への適応状況、留学動機、日本が留学の第一志望であったかどうかなどの分析視点も加えた研究が望まれる。

## 注

- 1) Windham, D. M. "Foreign Students and the Promotion of the Internationalization of Higher Education in Host Nations," *A Report of the OECD Seminar on Higher Education and the Flow of the Foreign Students*, OECD / CER, 1998, p. 6.
- 2) Anderson, J. F. and Powel, R., "Cultural Influences on Educational Process," L. A. Samovar

- and R. E. Porter (Eds.), *Intercultural Communication : A Reader*, Belmont, Calif. : Wadsworth Pub. 1988, p. 220.
- 3) Wagner, A. P., "Foreign Students : A Leading Edge for Change," (A Keynote Report), Presented to the OECD Seminar on Higher Education and the Flow of the Foreign Students, Hiroshima, 1988.
- 4) E. ライシャワー (国弘正雄訳) 『ザ・ジャパニーズ』文芸春秋, 1979年, 183頁。
- 5) 喜多村和之『大学教育の国際化』玉川大学出版部, 1987年。  
「日本の大学における外国人教員—全国調査結果の概要」『大学研究ノート』第43号, 1980年。  
「日本の大学院教育に関する留学生の意見調査—全国調査結果の概要」『大学研究ノート』第52号, 1982年。
- 6) 片岡徳雄・喜多村和之編『大学授業の研究』玉川大学出版部, 1989年。
- 7) バック・トランスレーションとは, まずはじめに一人以上の翻訳者がある言語で書かれた質問紙・テストを第二の言語に翻訳し, 次に全く別の翻訳者が, それをまたさらに元の言語に訳し直す。そしてこの2つの元の言語で書かれた質問紙・テストを詳細に比較し, 翻訳上の相違がないかどうかを検討して, 異なる言語で書かれた等質のテストを作る比較文化研究の一技法である。
- 8) Selltitz, C., Wrightsman, L. S. and Cook, S. W., *Research Methods in Social Relations*, NY : Holt, Rinehart and Winston. 1976.
- 9) 異文化適応度は, 次の11の質問に対する回答によって得点化したものである。「私の日本語能力は上達している」「私の研究・勉強は, 着実に成果が上がっている」「私は自分の勉強を楽しんでいる」「勉強する時間が十分に保証されてない」「私の周りには, 相談できる日本人の友人がいる」「指導教官の指導に満足している」「同じ国から来ている留学生に親しい友人がいる」「日本の気候に慣れた」「\*\*は住みやすいと思う」「いま住んでいる住居の住み心地はよい」「私はよくホームシックにかかる」。(なお, 最後の質問は, 正負逆方向で得点化している。また, \*\*は調査を行った大学の所在地名である)
- 10) Barry, R., "Clarifying Objectives," O. Milton and others (Eds.) *On College Teaching : A Guide to Contemporary Practice*, San Francisco : Jossey - Bass, 1978, pp. 9-33.
- 11) J. ローマン (阿部美哉監訳) 『大学のティーチング』玉川大学出版部, 154-158頁。
- 12) J. ローマン, 上掲書, 189頁。
- 13) 喜多村和之, 上掲書, 188-189頁。
- 14) 片岡徳雄・八並光俊「高等教育における教授学習過程の研究—学生評価を中心に」『一般教育学会誌』第9巻第2号, 1987年, 44頁。
- 15) 片岡・喜多村編, 上掲書, 230-233頁。

## International Students' Adjustment and Criticism toward Japanese University Education : Quantitative and Qualitative Analyses

Asako UEHARA\*

Hirotohi YAMASAKI\*\*

The purposes of this study were to investigate how international students evaluate Japanese university classes, and to examine future possible directions of instruction to improve teaching methods for both Japanese and international students. 374 international students who attended three major universities in western parts of Japan were surveyed from September, 1988 to January, 1989. They were asked about their opinions on characteristics of what constitutes a "good class" at the respective universities which they were attending.

Answers to the closed questions were analyzed by employing cross-tabulation analysis and factor analysis. They were also compared with the previous findings on Japanese students' opinions about what constitutes a "good class" at Japanese universities. Answers to the open-ended questions were analyzed by content analysis.

The data from the survey of international students revealed that they evaluated most highly the classes in which there was considerable interaction between the teacher and students, and among students themselves. The data from the previous survey of Japanese students showed that these students preferred classes in which the teacher was enthusiastic, provided clear lectures, and considered their attitudes empathetically. Japanese students' attitudes in class seemed to be passive, compared with those international students, who were not satisfied with such "one-way" lectures. They valued active participation in classes from all who were involved in class.

The results also indicated that international students tended to highly evaluate seminars and graduate classes which were effective and allowed room for creativity. It appeared that, for them, many undergraduate classes were more problematic than graduate courses. Also a number of international students tended to evaluate Japanese professors more highly as scholars and researchers but less highly as teachers.

Many Asian students, particularly from China, expressed their satisfaction with the free atmosphere in Japanese schools, and with the elective subject system.

Additionally, the results indicated that those international students who were older, attended graduate schools and felt adjusted to Japanese ways of living tended to be more satisfied with classes at Japanese universities.

---

\*Associate Professor, Hiroshima University (Affiliated Researcher, R.I.H.E.)

\*\*Lecturer, Hiroshima University (Affiliated Researcher, R.I.H.E.)

Lastly, the number of international students has been dramatically increasing on Japanese university campuses, and it is expected that they will continue to increase over the coming several years. In order to accommodate and educate students from different parts of the world, it is necessary for teachers to understand each international student's needs, including his / her language competency, as well as his / her different cultural and educational background. At the same time, it appears that international students' perspectives of Japanese university classes will help Japanese educators to examine their traditional teaching methods and to improve and internationalize education for both international and Japanese students.

